

〈幼児教育〉

互いの思いを伝え合うことのできる幼児の育成

——工夫したり協力したりする遊びを取り入れた「劇づくり」を通して——

宜野湾市立嘉数幼稚園教諭 野原信哉

I テーマ設定の理由

近年、幼児の育ちについては、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。子どもを取り巻く環境においては、少子化や核家族化で一人っ子の増加などにより、子ども同士で遊ぶことや葛藤しながら成長する体験が減少している。都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、幼児はテレビゲームやインターネットなどの室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。

『幼稚園教育要領解説』の「幼児期の特性と幼稚園教育の役割」では、「幼児期は、自然な生活の流れの中で直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎を培う時期である。」また、「近年、家庭や地域において幼児が兄弟姉妹や近隣の幼児とかかわる機会が減少していることを踏まえると、幼稚園において、同年齢や異年齢の幼児同士が相互にかかわり合い、生活することの意義は大きい。」とある。このことから、これからの学校生活や社会の一員として自立できるためには、幼児期において人とかかわる力を養うことが大切であると考えられる。さらに「人間関係」の領域では、「幼児は幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して、互いに理解し合う体験を重ねながらかかわりを深め、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わえるようにすることが大切である。」と記されている。幼児同士が共通の目的を生み出し、工夫し、協力するなかで様々な感情体験をし、折り合いを付けて遊びを進めていくことは、人とかかわる力を養う上で大切であると考えられる。

そのような中、本園での子どもたちの遊びの様子を見ると、戸外遊びを好み、友達と三輪車や砂遊びなど、仲間とかかわって遊んでいるように見える。しかし、相手の思いや考えを受け入れず、自分の思いばかりを主張し、嫌な思いをさせてしまう幼児の姿が見られるなど、互いの思いや考えを伝え合って遊びや活動を進めていないように思われる。

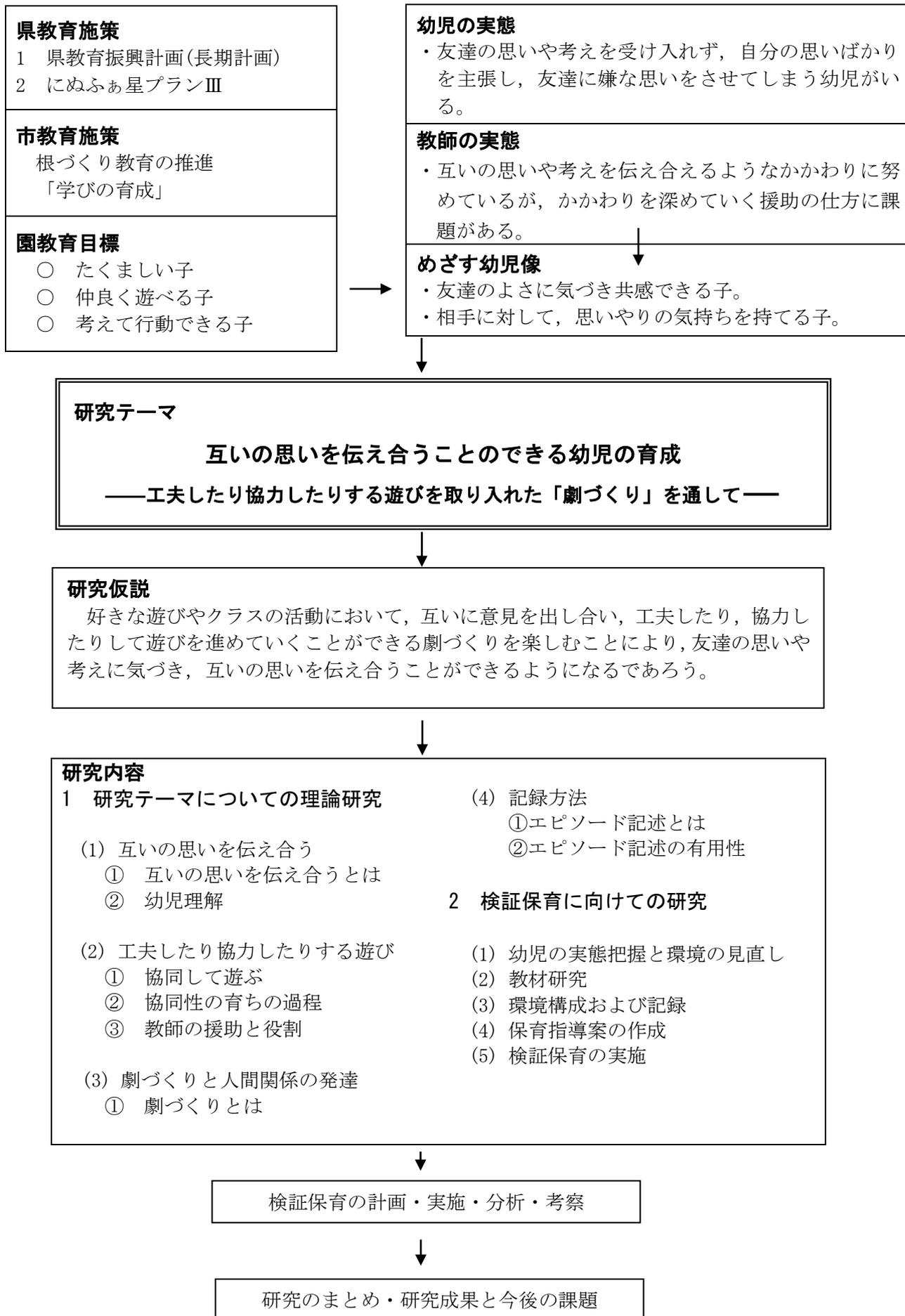
このような実態において、教師は幼児が互いの思いを伝え合うことができるように、仲介をしたり、一緒に考え合ったりするような援助を心がけたが、表面的には解決したようにみえたが、幼児自身が互いに納得いくような内面に働きかける援助を行えていなかった。

そこで本研究では、好きな遊びやクラスの活動において、互いに意見を出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを進めていくことができる「劇づくり」を楽しむことにより、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

好きな遊びやクラスの活動において、互いに意見を出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを進めていくことができる「劇づくり」を楽しむことにより、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 互いに思いを伝え合う

(1) 互いの思いを伝え合う

幼稚園教育要領解説(以下、『要領解説』と略す)の領域「人間関係」には、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。」と述べられている。人とかかわる力を養うためには、幼児は、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになることが大切であると考え。『保育用語辞典第5版』(森上史朗他 2009)に、「幼児の発達を見る視点」として以下のように述べられている。(表1)

表1 幼児の発達をみる視点(森上史朗他)

<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分自身で行うことの充実感を味わうことができるようにすること。 ・集団生活の中で、一人一人の幼児が自己を発揮し、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや、共通の目的を実現する喜びが体験できるよう、その過程を大切にすること。 ・幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、お互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、決まりの必要性などの気づき、規範意識の芽生えが培われること。

この領域で大切なことは「友達とかかわりながら、心と心が深く触れ合い、喜びや悲しみを共感し合うようになるその過程を大切にすること。」であると述べられている。

幼児同士が、幼稚園生活において、互いの思いや考えを伝え合うことで、喜びや悲しみ、怒りなど、様々な葛藤体験をし、多様な感情体験を重ねることにより、心と心が深く触れ合い、人間関係が深まっていくことができると考える。幼児が遊びや活動をする中で、イメージを共有し、互いの思いや考えを伝え合い、工夫したり協力したりする。つまり、協同して遊ぶようになっていく。教師は、その過程を大切にしながら、一人一人の幼児とかかわることで、幼児理解し、発達の課題をとらえ、その子やグループに合った環境構成や教師の援助を心がけることが大切であると考え。

(2) 幼児理解

① 幼児理解とは

『保育用語辞典第5版』で、幼児理解とは「幼児の行動をよくみて、その行動の意味を理解することである。そのためには外面にあらわれた行動だけでなく、幼児の内面の心の動きを捉える必要がある。」とある。また、「保育の中で幼児を理解する重要な視点」を以下のようにまとめられている。(表1)

表2 保育の中で幼児を理解する重要な視点

共感的理解	幼児の見方、感じ方にそって幼児の行動の意味を理解しようとするもの。
個別的理解	幼児一人一人をかけがえのない存在として捉えていこうというもの。幼児一人一人のその子の状況を把握して、その子に「なってみて。」理解しようとする。
発達の理解	幼児の行動を発達的にとらえていくこと。“できるようになったこと”のその子にとっての意味、また“できないこと”あるいは“やろうとしないこと”のその子にとっての意味を捉えていくことが必要である。
生態的理解	幼児が現実生活しているありのままの状況、生態的な状況下で理解すること

② 幼児を理解するための視点

『幼児理解と評価』(2010)を基に幼児を理解するための視点を以下にまとめた(表3)

表3 幼児を理解するための視点

ア	幼児を肯定的に見る。 様々な幼児の姿を発達していく姿としてとらえる、その幼児の持ち味を見付けて大切に する、その幼児の視点に立つ。
イ	活動の意味を理解する。

活動において幼児自身が経験したことがその幼児の内面的成長にどのように関係するか理解する。
ウ 発達する姿をとらえる。 ほとんどの幼児が通っていく道筋をとらえて、一人一人の幼児が、その道筋をどのように自分の足で踏み固めながら歩んできているかを読み取る。
エ 集団と個の関係をとらえる 集団と個々の幼児との関係を受け止めて、具体的な保育の手だてを考えていく。
オ 保育を見直す 一人一人の幼児の発達をとらえ直し、「ねらい。」を踏まえて、環境構成するなどの必要な援助を改善していく。

『幼児理解と評価』(2010)に、「幼児を理解することが保育の出発点であり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくる。」と述べられている。幼児一人一人の行動をよく観察し、発達の特長や課題をとらえ、幼児の内面で起こっていることを理解し、今、遊びの中で必要としている経験を援助できることが求められる。

2 工夫したり協力したりする遊び

(1) 協同して遊ぶ

『要領解説』に「イメージを共有し、それを実現しようと、幼児たちが、ときには自己主張がぶつかり合い、折り合いを付けることを繰り返しながら、工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わうようになっていく。」と記されている。これを協同して遊ぶと捉えることができる。神長美津子(2010)は、「互いに自分の思いを主張し、ぶつかり合うことを通して一つの活動に向かう姿であり、協同する友達との間には互いのよさが認め合える関係がある。」と述べている。幼児は、遊びの中で、友達とかかわり、工夫したり、協力したりする経験、つまり、協同して遊びを進めていく体験を重ねていくことで、互いの思いを伝え合い、自己主張をしたり、相手の思いを受け入れたりなど、折り合いを付け、互いの違いやよさに気づき、一緒に活動する楽しさ、共に生活をする喜びなどに気付いていくことができると思う。

保育実践において、協同して遊びを進めていく経験を重ねることができるよう教師の援助や環境構成を行い、幼児が互いの思いを伝え合い、かかわりが深められるようにしていきたい。

(2) 協同性の育ちの過程

池田多津美(2009)は協同性の育ちの過程を以下のようにまとめた。(表2)

表4 協同性の育ち

① 教師など身近な大人に親しみ、安定し、しだいに人やものへの関心を広げる時期 一人一人がものとじっくりかかわる経験が他者との出会いの機会をつくる。
② 友達とかかわる楽しさを味わう時期 ものや動き、場や雰囲気などを共有して、友達と一緒にあそぶことを求め、楽しむ。
③ 友達とかかわる中で自分の思いを発揮したり、いろいろな感情体験をしたりしながら、自分の力を知っていく時期 失敗や試行錯誤、自己主張のぶつかり合いによる挫折や葛藤を味わい、それを乗り越え相互に認め合える関係を築いていくという紆余曲折する過程が経験として大事になる。
④ 様々な葛藤を乗り越え、自分の思いを発揮したり他者のよさがわかったりして、協同する楽しさが味わえるようになる時期 気の合う友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを十分味わうとともに、ルールのある集団遊びや当番活動などを通して、いろいろな友達と一緒に活動することを大事にしたい。様々な思考、イメージ、好み、雰囲気、力などもつ友達と出会うことで自分だけでは味わえない遊びの世界を体験できる。友達の多様性に触れることは自分自身のよさや可能性に気付くことでもある。
⑤ 友達と協同し、互いのよさを認め合う中で、自分に自信がもてるようになる時期 入園当初からのなんでもやりたいという意欲、コミュニケーション力、規範意識の芽生え、知識・技能等、体験に根ざした様々な学びが生きてくる。

池田(2009)は、「自己の発揮」と、「他者とのかかわり」の両方が関連して自分と他者との関係性、すなわち協同性が育つと考えている。教師は、協同性の育ちを理解し、個人差のある幼児の現在の発達を把握することで、一人一人に合った育ちを保障し、一人一人に応じた援助を心がけることができる考える。入園当初は教師との信頼関係を築き、ものとじっくりかかわって遊ぶ時期から、しだいに他者とのかかわりを楽しみ、自己主張や自己発揮を繰り返す中で、様々な感情体験、試行錯誤をし、しだいに互いのよさが認め合えるようになっていく。そこで保育実践では、幼児一人一人の協同性の育ちの把握に努め、互いの思いの思いを伝え合い、協同して遊びを進めていく中で、互いのよさを認め合い、思いやりややさしさが身に付いていくような教師の援助を心がけたい。

(3) 教師の援助と役割

『要領解説』に「協同して遊ぶようになるためには、集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程や、幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めていくことが重要である。」と述べられている。また、教師の援助と役割を『要領解説』や『初等教育資料』(2009)、『領域人間関係』(2007)で以下のように述べられている。(表5)(表6)

表5 教師の援助

<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児一人一人の言動や内面の動きをとらえ、幼児同士の思いや考えがつながるような援助 ・ 幼児が必要感を持って友達と協力するようになるための援助 ・ 課題を乗り越えて実現していく喜びを味わえるようになるための援助 ・ 他のグループと影響し合えるような援助や環境の構成 ・ 他者とのやり取りの中で幼児が自他の行動の意味を理解し、何がよくて何が悪かったのか考えることができるように、それまで気付かなかったことに気付くように働き掛けていく援助
--

表6 教師の役割

活動の理解者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人の子どもを共感的に理解し、必要とされている援助をしていく。 ・ 個の行動傾向や、意図や欲求などの内面を理解する。
共同作業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者は、自ら主体的にかかわり、活動するモデルを示していく。 ・ 遊びや生活、そのなかのさまざまな作業を子どもと共同でしながら、目的を確認したり、調整し合うことを援助したり、みんなですることの心地よさ、達成感や充実感を子どもが得られるように援助していく。
遊びの援助者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもはどのような遊びに興味があるのか、どのようなことにおもしろさを感じているのか、その遊びを楽しむための身体、感情、知的発達はどうか、遊びのなかで友達とどうかかわっているのか、その遊びを通して何を体験するのかなどの理解をもとに環境を構成していく。子どもにとって、おもしろく、意味のある「もの。」「人。」「状況。」を準備し、それらとの出会いを子どもに提供していく。

以上のことから、教師は活動の理解者として一人一人を共感的に理解し、個人やグループ同士で、工夫したり協力したりできるような環境構成を行ったり、共同作業者として一緒に活動を行う中で、幼児同士の思いの違いに気付かせ、折り合いがつけていけるよう一緒に考えたり、ヒントを与えたりするなどの遊びやその場の状況に応じて多様なかかわりを繰り返すことで、互いのよさに気付かせるような援助を行っていきたい。

(4) いざこざや葛藤を通して育つ協同

勅使千鶴ら(2010)は、『「いざこざ」は、生活の中でそれを具体的に経験することによって「初めて相手の立場を知り、因果関係を把握し、自分と他との関係が鮮明になって、自己というものがだ

んだん鮮明になり、さらにその広がりや深まりが見られる。」『幼児期の特徴的な行為』と述べている。葛藤とは、『保育用語辞典第5版』によると、「心の中に同時に相反する2つの欲求が存在し、どちらにしてよいか決めかねている状態をいう。(中略)ある程度の葛藤は、自己決定力を促す要因となる。」とある。友達とのかかわりを通して、幼児はたくさんのいざこざや葛藤を体験する。その中で自分の思いを相手に伝え、相手の思いにも気づくことを学んでいくことができると考える。友定啓子(2010)はいざこざや葛藤場面での保育的意義を以下のようにまとめている。(表7)

表7 いざこざや葛藤場面での保育的意義

<p>① 自己回復の体験 教師が言葉で表現できずに、防衛や攻撃という形で、身体的な表現をする幼児の状態を受け止め、支えることによって、子どもは一步進んで、自分をコントロールして問題に取り組むことができる。多くの教師は、子ども自身で問題に対処できるように、子どもの気持ちを受け止め、共感しながら、身体的・心理的基盤を整えることを重視している。</p> <p>② 共生の体験をする トラブル場面で教師が重視していることは、子どもが自分の思いをことばで表現すること、また相手の表現を受けとめ理解することである。トラブルの根底には、相手に対する関心があるととらえ、自分の気持ちを伝える具体的な方法を教え、子どもたちの思いをつないでいく、すなわち共生の体験になるようにかかわっていた。</p> <p>③ 解決法を学ぶ 教師は、どうしてトラブルになったのか子どもに聞いたり、説明したり、解決の方法を示したり解決について子どもと相談したりしていた。トラブルの内容は多岐にわたり、また、子どもの状態や解決の条件も多様であり、それによって解決法も多くのバリエーションを持っている。このように様々な解決法を体験することによって、解決法のストックを作るとともに、一つ一つの場面で考えていく力を育てていた。</p> <p>③ 価値や規範を学ぶ トラブルの場面において、教師の願いや思い、たとえば、他者の心やからだを傷つけてはいけないこと、譲ることや許すことなど、人と一緒に生活していくための規範(善悪・価値・文化)を伝えていく場になっていた。</p>

以上のことから、保育実践において、いざこざや葛藤場面を友達と思いを伝え合い、相手の思いや考えに気付くことができる機会と捉え、教師は、幼児の内面理解に努め、共に考えるカウンセリングマインドを持った姿勢でかかわり、自分の気持ちを調整する力や、自分たちで解決していこうとする力を育てていけるような援助をしていきたい。

カウンセリングマインドとは、「目の前の子どもや患者の内面を深く理解しようと努め、そのためにカウンセリングの基本的精神を学び、その精神を子ども理解や患者理解にいかそうとする態度」と『保育用語辞典第5版』に載っている。また、『要領解説』では以下のような配慮が必要であると述べられている。(表10)

表10 カウンセリングマインド

<p>① 幼児の行動に温かい関心を寄せる。 幼児をそのまま受け止め、期待をもって見守ることである。幼児が他者を必要とするときに、それに応じる姿勢を教師は常に持ち、幼児の発達に対する理解と自分から伸びていく力をもっている存在としての幼児という見方に支えられ生まれてくる教師のまなざし、あるいは言葉や配慮なのである。</p> <p>② 心の動きに応答する。 幼児の心の動きに対して柔軟な応じ方をすることが重要である。教師が答えをすべて示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合ったりするかわり方が求められる。</p> <p>③ 共に考える。</p>
--

相手の立場に立って、相手の調子に合わせて考えようとする姿勢が必要であり、幼児と一緒に過ごし、その心に寄り添いながらその幼児らしい考え方や思いを大切にすることが重要である。

3 劇づくりと人間関係

(1) 劇づくりとは

① 幼児期における劇的活動について

劇的活動とは、言語活動、身体表現、集団活動などの経験を通して教育効果が得られる活動である。劇的活動には、「劇遊び」と「劇化」があると捉える。(表 8)

表 8 幼児期における劇づくり

「劇遊び」

豊田君夫(1980)は、劇遊びとは、「劇的要素のある遊びで、話、人、場の 3 要素のある遊びで、自由で生き生きとした活動であり、子どもたち自身で遊びの中から創り出すものである。また、劇遊びは表出遊びである。」と述べている。

「劇化」

勅使ら(2013)は今ある子どもの姿を把握し、子どもたちへの育ちの願いや子ども像を明確にし、今、解決すべき問題を捉え、子どもたちに働きかけるという保育方法。

子どもの発達を捉え、クラスで話し合い解決を探ることのできる「劇化」と、好きな遊びにおいて、子どもの興味・関心を引き出し、遊びの中で、さまざまな話し合いを重ね、工夫したり協力したりすることのできる「劇遊び」を総称して「劇づくり」と捉えた。どちらも日常の保育の中に取り入れていくことで、様々な思いを伝え合って活動を進めていくことができ、多様な感情体験を重ね、友達のよさや考えの違いに気付いたり、工夫したり協力したりする協同して遊びを進めていくことができ、人間関係の形成に有効であると考えられる。

② 劇づくりで身に付く子どもの能力

劇づくりで身に付く子どもの能力について、田川浩三(2010)や糸数美智子(1980)の文献を基にまとめた。(表 10)

表 10 劇づくりで身に付く子どもの能力

- ア 子どもの自由な想像力や発想力、創造性、表現力、自主性、協調性、応用力
- イ 自然や社会、文化への理解
- ウ 心の解放や言語の獲得
- エ 友達とかかわりながら遊ぶ中で自らの思いを主張し、また仲間の気持ちを思いやる力などのいろいろな社会性
- オ 本能的な喜怒哀楽、勇気、意欲、思いやり、優しさ、信頼、我慢など、豊かに情操を高め人間的な感性と思考力を育てる。

劇づくりは表現活動であり、表現力や想像力、言語の獲得などにおいて、領域「表現」や「言葉」等とも深く関連している。幼児教育は 5 つの領域が相互に関連しあい、総合的に発達していく所以であると考えられる。「人間関係」においても、劇を創っていく過程を通して、工夫したり協力したりして遊びを進める協同する経験を繰り返し重ね、互いに思いを伝え合って遊びを進めていくことができ、自分の思いを伝えたり、相手の思いや考えにも気づくことなどができ、社会性が身に付いたり、様々な感情体験を重ね、豊かな情操の形成につながり、人とかかわる力が身に付いていくことができると捉える。

これらの総合的な幼児の育ちを大切にしながら、教師は、劇づくりを通して、「集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程」、「幼児が試行錯誤しながらも一緒に実

現に向かおうとする過程」「いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程」を大切にし、互いの思いを伝えている場面を見守り、必要な援助や環境構成を行う中で、折り合いを付ける体験を重ね、豊かな情操や社会性、道徳性を身に付けるような指導を行いたい。

③ 劇づくりの効果

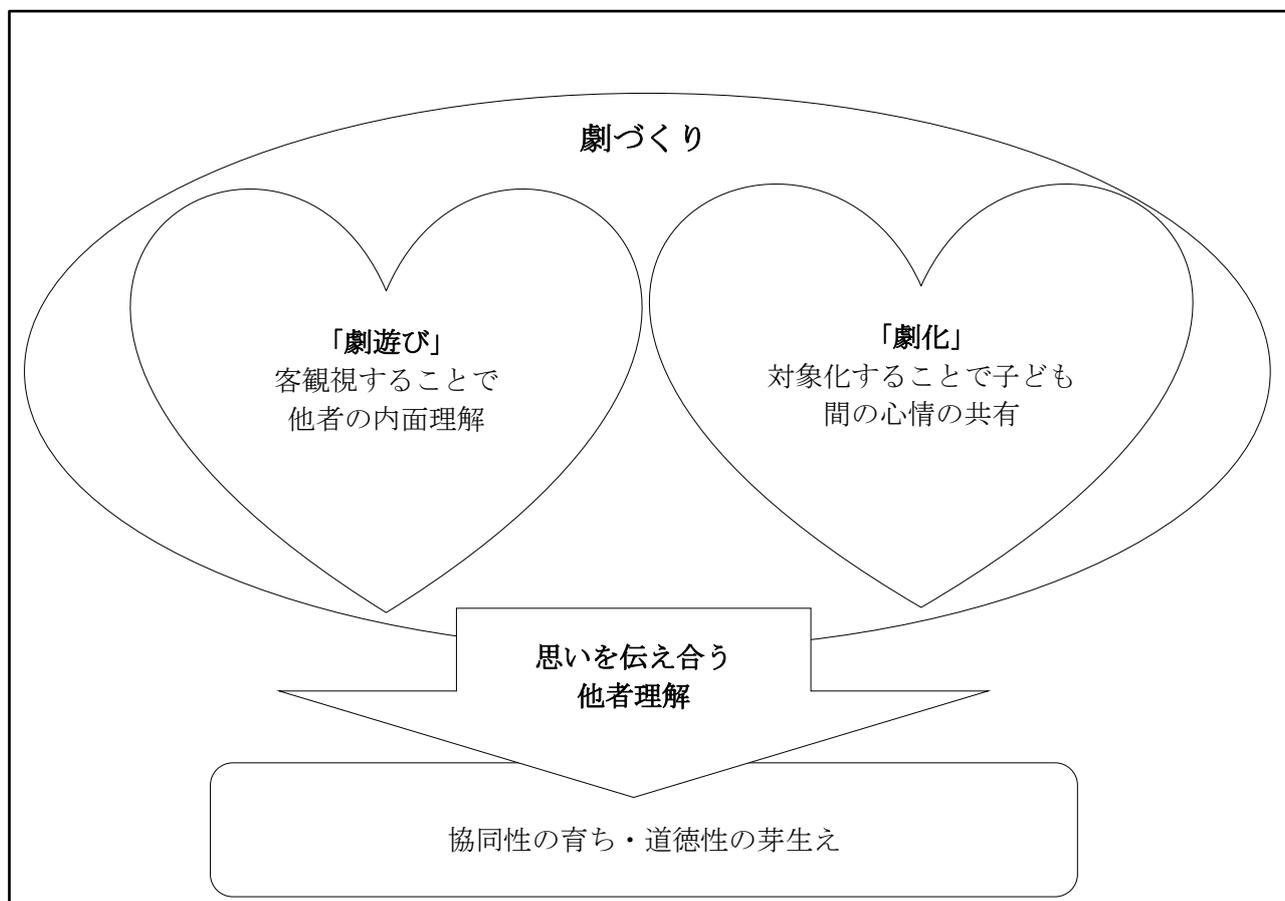


図2 劇づくりの効果

勅使(2013)は、「劇化は、その時の感情や思いといった自分のみならず他者の内面をも対象化し、そのことで子ども間の心情の共有を促す。」また、田川(2010)は、劇において「その役がどんなキャラで、今どんなときに、どんな状況のもとで何をしたいのか、誰に向かって言うのか、役の内面の心情と状況を踏まえたうえで表現する。」と述べている。「劇遊び」・「劇化」は行う活動は異なっているが、「思いを伝え合い、他者を理解する。」ことは共通しており、日常の遊びや生活で行うことで、相手の立場に立ち物事を考える体験を行い、他者の内面を理解し、思いやりや優しさなどの道徳性の芽生えにつながっていくと考える。

これまで、幼稚園生活において、幼児同士のいざこざや葛藤などの課題があると、場面を捉え、個別対応やクラスの活動などにおいて「劇化」し、互いの思いが伝え合えるような援助を行ってきた。また、劇遊びにおいても、日常の遊びを拾い上げ、好きな遊びの時間やクラスの活動で行ったり、誕生会などの行事で披露したりしてきた。さらに、幼稚園生活の集大成である生活発表会においてクラスで協同して遊びが展開できるよう劇づくりを行ってきた。しかし、教師自身が日常の生活や行事をこなすことに精いっぱいとなり、幼児の興味・関心を十分にとらえ、内面に添った言葉かけや援助、十分な環境構成が行えていなかった。教師主導に展開していたのではないのだろうかと反省も残る。本来「劇づくり」で備わっていくであろう「協同性」や「道徳性の芽生え」などの幼児の育ちを十分に保障できていなかったように思われる。そこで、「劇づくり」の過程を捉え、幼児の内面理解を行い、思いを伝えている場面や協同して遊んでいる様子から教師が具体的な援助を行い、環境構成、再構成を工夫することで、幼児の心の育ちを保障し、協同性や道徳性の育ちにつなげていきたい。

④ 「劇あそび。」・「劇化」の過程と教師の援助・思いを伝え合う経験
『教育要領』・『「知的な育ち」を形成する保育実践』『初等教育資料』を参考に、「劇あそび」・「劇化」過程と教師の援助・思いを伝え合う経験をまとめた。(図2)

	過程	思いを伝え合う経験	教師の援助
劇あそび	<p>(幼稚園の中で一緒に生活を重ねる中で) 共通の経験や感動を伝え合う。</p> <p>↓</p> <p>イメージを共有し合う。</p> <p>↓</p> <p>相手と一緒にになって見立てる。</p> <p>↓</p> <p>役割を相互に決める。</p> <p>↓</p> <p>それらしく動くことを楽しむ。</p> <p>↓</p> <p>断片的な遊びから、目的やストーリーをもった遊び方へと変化する。</p> <p>↓</p> <p>それぞれのイメージを相手に分かるように表現し、共有する。</p> <p>↓</p> <p>共通のストーリーやルールをつくり出す。</p> <p>↓</p> <p>「〇〇ごっこをしよう。」などと遊ぶ。</p> <p>↓</p> <p>劇あそびへとつながっていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達をつぶやきを聞く。 ・自分のしたいことを言葉や動きで表現する。 ・教師を通して互いの思いを伝える。 ・自分の思いや経験を友達に伝える。 ・友達の話に興味や親しみをもって聞く。 ・友達の言葉や話を聞いてわかる。 ・自分の気持ちや考えを友達に言葉で伝える。 ・遊びのルールを理解する。 ・友達の話を受け止める。 ・友達と喜びや感動を共有し伝え合う。 ・友達とイメージを伝え合いながら遊ぶ。 ・役割分担をする。 ・友達のアドバイスや励ましを聞き入れる。 ・目的に向かって思いや考えを伝え合う。 ・友達のよいところを褒めたり認めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児のもっているイメージがどのように遊びの中に表現されているか理解する。 ・イメージの世界を十分に楽しむように、イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、幼児と共に環境を構成する。 ・多様なイメージを引き出す道具や用具、素材を工夫し、それらに日常的に触れていく環境を工夫する。 ・一人一人の幼児が十分に自己発揮しながら、他の幼児と多様なかわりがもてるように援助する。 ・共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさが十分に味わえるようにする。
劇化	<p>今ある子どもの姿を把握する。</p> <p>↓</p> <p>子どもたちへの育ちの願いや子ども像を明確にする。</p> <p>↓</p> <p>今、解決すべき問題を捉える。</p> <p>↓</p> <p>子どもたちに働きかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや考えを相手にわかるように話す。 ・思いを出していない友達に気づき意見を聞く。 ・互いの考えを受け止めて調整する。 ・友達の思いや考えを受け止めて自分の思いや考えを伝える。 ・場や状況に応じた言葉の使い方がわかり、伝えられる。 ・相手にわかるように言い方を変える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが、生活の中で起きた問題を対象化しそこで起きている問題を客観視することを促す。そして、客観視できたことが日常生活に還元され、生活に生かされ、生活のあり方に変化を与える。 ・劇化は、その時の感情や思いといった自分のみならず他者の内面をも対象化し、そのことで子ども間の心情の共有を促す。
心の育ち	<p>自己表出 感じる心 自己理解</p> <p>自己発揮 思いやり 自尊感情</p> <p>自己抑制 共感 他者理解</p> <p>自己コントロール 有能感</p>	<p>援助 具体的</p> <p>受け止める・認める・支える・共感する</p> <p>つながりをつくる・橋渡しをする</p> <p>モデルになる・代弁者になる・トラブルの解決を手伝う</p> <p>遊びを伝える・技能を伝える</p>	

図2 「劇あそび」・「劇化」の過程と教師の援助・思いを伝え合う経験

幼児は、劇づくりを展開する中で、工夫したり協力したりして遊びを進め、自分の思いや考えを言葉や身体で表現している。入園当初は教師を仲立ちとしながら、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の考えを受け入れたりしていくことで、しだいに互いの考えやイメージを共有し、役割分担をしたり、ルールを作ったりしながら遊びを進めていくようになる。このような協同して遊びを進めていく過程を繰り返し重ねる中で、友達と過ごす楽しさを味わい、力を合わせ、目的を実現する喜び、さらには、友達のよさを認めるようになっていたり、他者の気持ちに気づき、思いやりや優しさをもったりするなどの道徳性の芽生えを身に付けていくようになる。教師は幼児の遊びの中から、子どもたちに今、何が育とうとしているのか、何が必要であり大切であるのかを見極め、遊びのヒントを与えたり、共に考えたりするなどの援助を行っていくことが重要であると考え。グループやクラスにおいての課題を捉え、共に考えていくことができる環境構成を行い、状況に応じてさらに再構成、工夫を加えていく。そのような援助を繰り返すことで、幼児が互いに考えを伝え合い、力を合わせて解決できるような経験を重ねることができるようになることが大切であると考え。

4 記録方法

本研究において、幼児の変容を捉えるために、ビデオでの記録とエピソード記述(鯨岡峻 2005)を用いる。

(1) エピソード記述について

① エピソード記述とは

エピソード記述とは、『保育用語辞典第5版』によると「ある特定の具体場面を、そこに関係する人物の行動やかかわりの展開に留意して、できるだけ詳しく記述したもの」であり、「現場のなかで立ち上がる問いについて、その問いとの関連のなかで、その現象の何らかの『意味』が見えてきたときに浮かび上がり、描き出されるもの。」とされている。さらに「保育実践から立ち上がるさまざまな問題について、その本質に接近していくための質的研究の資源の一つとなるもの」である。

② エピソード記述の有用性

鯨岡峻は、「エピソード記述はエピソードの単なる記録とは違って、あくまでもその場面を体験した人がその体験を描くこと」であり、「そこには必ず『私は〇〇と思った』『私は〇〇と感じた』というような一人称の記述が入り。」「『客観的な記録』とは趣を異に。」する、と記している。また「書き手の心が揺さぶられたことが中心」となり、「心動かされる出来事(略)を描くことを通して、子ども一人一人の心の動きが分かり、自分の対応が自分に見えてきて、保育の振り返りに繋がる。」と述べている。

鯨岡(2009)は、エピソード記述を描くことで、「子どもの思いを受け止め、そこで保育者に感じ取られたことに基づいて対応を返すところに、本来の保育のかたち」があると述べている。エピソード記述することで、幼児の内面を捉え、その変容を描くことができると捉える。

これまで私は、子どもの遊びの場面で起こるいざこざや葛藤場面などにおいて、「やった、やられた」などの表面的なことばかりを取り上げ解決を行い、子どもの内面まで深く読み取るところまでには至っていなかった。また、保育者として感じていたことを口頭で他の保育者と共有することはあっても、エピソードとして記述するまでには至っていなかった。そこで、保育の場面をエピソード記述で描くことで、目に見えない幼児の内面を捉え、幼児理解をし、教師のかかわりを考えていくことで、互いの思いを伝え合うことができるような援助ができるのではないかと考える。また、記述することで、私自身の保育を客観的に振り返り、他の保育者にも伝えることで教師のかかわりの工夫を図っていくことができると考える。

③ 本研究におけるエピソード記述の分析の視点

ア 他者とのイメージが共有されていく場面を捉え、その変容を描く。

イ 他者への関心(他者への思い、関心、考え、ふるまいなど)がどのように高まっていくか、その変容を記述する。

V 検証保育

検証保育指導案

平成 26 年 1 月 28 日 火曜日
嘉数幼稚園 すずらん組
男児 11 名 女児 13 名 計 24 名
保育者 野原 信哉
外部講師 吉葉 研司
研修係長 知念 克治

- 1 主な活動名 「創作劇をしよう。」
- 2 ねらい
 - ・ 劇づくりを進める中で、互いの思いや考えを出し合い、イメージを共有して活動を進めていく。
 - ・ 友達と工夫したり協力したりして劇づくりを楽しむ。
- 3 内容
 - ・ セリフを述べたり、演じたりする中で、自分の思いや考えを相手に伝える。
 - ・ セリフを述べたり、演じたりする中で、相手の考えに耳を傾け、イメージを共有する。
 - ・ グループやクラスでセリフや演技について話し合い、折り合いをつけ、自分の演技に取り入れる。

4 活動設定の理由

幼稚園教育要領、領域「人間関係」内容(8)に「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」とある。『要領解説』において、「イメージや目的を共有し、それを実現しようと、幼児たちが、ときには自己主張がぶつか合い、折り合いをつけることを繰り返しながら、工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わうようになっていく」とある。つまり協同して遊ぶことができるようになっていくことができるのである。

そこで、教師が学級活動を通して、互いの思いが伝え合うことができるような場を設定し、適切な幼児理解のもと、援助を工夫することによって、友達の思いや考えに気付き、互いの思いを伝え合っ

(1) 教材観

劇づくりでは、役柄ごとや全員で、「劇を創る」という共通の目的をもち、イメージを共有していき。イメージを共有する中で、互いの思いや考えを伝え合い、自己主張したり、相手の考えに耳を傾け、取り入れたりするなど、折り合いをつけて劇づくりに取り組んでいく。ストーリーやセリフを話し合い、役作り、小道具づくりなどを通して、様々な工夫を凝らし、友達と力を合わせ、協力して遊びを展開し、協同して遊びを進めていく経験を重ねることができる。

本時の保育では、生活発表会に向けて、幼児が役柄ごとや全員で互いの思いや考えを伝え合いながら劇づくりに取り組む中で、協同して遊びを進めるのに有効な教材であると考え。

(2) 幼児感

好きな遊びでは、気の合う友達に互いの思いや考えを伝え合い、イメージを共有し、工夫したり協力したりして遊びを進めている幼児が多い。一方、まだ自分の思いや考えを言葉や態度で表すことができずにいる幼児も見られ、個人差がある。クラス全体を見ると、自分の思いや考えを強く主張する幼児と、うまく伝えることができない幼児との差が見られる。自己主張が強い幼児同士が、言い合いになることが多く、周りの幼児が自分の思いや考えをうまく伝えられずにいる。

(3) 指導観

劇づくりを行うことで、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞きいれたりし、工夫したり、協力したりして、協同して遊ぶ経験ができるようにしたい。役柄ごとにセリフや演技について考えを伝え合い、工夫している姿を認め、思いや考えを引き出せるようにする。互いに言い合いになる場面では、話し合う場や時間を保障し、折り合いを付け、工夫したり協力したりして劇遊びが展開できるようにする。

指導案 平成 26 年 1 月 28 日(火)		すずらん組 男児 11 名 女児 13 名 計 24 名 保育者：野原 信哉	
＜主な活動名＞		「創作劇をしよう。」	
研究 仮説	好きな遊びやクラスの活動において、互いに意見を出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを進めていくことができる劇づくりを楽しむことにより、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになるであろう。		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 劇づくりを進めていく中で、互いの思いや考えを出し合い、イメージを共有して活動を進めていく。 友達と工夫したり協力したりして劇づくりを楽しむ。 	内容	<ul style="list-style-type: none"> セリフを述べたり、演じたりする中で、自分の思いや考えを相手に伝える。 セリフを述べたり、演じたりする中で、相手の考えに耳を傾け、イメージを共有する。 グループやクラスでセリフや演技について話し合い、演技に取り入れていく。
時 間	○予想される幼児の姿 ☆教師の援助		*評価項目 (幼児の姿)
10:00	○クラスで前日までの劇づくりの様子を話し、それぞれの役の課題や目標を伝え合う。 ☆役ごとに思いや考えを伝え、協力して活動を進めていけるように、頑張りたいことなどを伝え合えるようにする。		*自分の思いや考えを伝え合っているか。
10:15	○舞台へ移動し、劇づくりに参加する。 【魚役】 ○グループで声をそろえてセリフを述べるが、動作が小さいことがある。 ☆魚らしい動きや動作を大きく演じることができるような言葉かけや、友達同士で相談できるような場を設け、自分たちで考えて演技を進めていけるようにする。 【人魚役】 ○セリフをそれぞれで伝え、声が揃わず、ろうやに閉じ込められているときにお喋りをして自分のセリフを言い忘れてしまうことがある。 ☆友達同士で話し合わせ、どのようなセリフがよいのかを一緒に考え、工夫できるようにする。 【おばけ役】 ○友達同士で力を合わせてセリフを伝えているが、笑いながら表現するなど、「怖さ。」というイメージが持っていない様子が見られる。 ☆「怖い。」というイメージを感じることができるセリフや動作を教師も一緒に考え、演技に生かせるようにする。 【海賊役】 ○リーダーを中心にセリフや動作を行っているが、動作やセリフの声が小さい子がいる。 ☆演じることが苦手な子には、教師もいっしょに考えたり、認めたりして、演じる楽しさや友達と一緒に協力して進める楽しさが味わうことができるようにする。 【忍者役】 ○自分本位の活動をする子がいる。劇づくりに興味をもてず遊ぶ子がいる。 ☆役同士やパートナーで動作やセリフを合わせるようにし、力を合わせて協力して活動すすめていけるようにする。 ☆興味が逸れてふざけてしまう子には、忍者のイメージが持てるような言葉かけをしたり、お客になってもらったり、友達と協力してかかわるためにはどのようにしたらよいか考えることができるようにする。 ○自分たちの出番以外で遊んでしまい、お喋りをする様子が見られる。 ☆クラスで「劇を創る。」という目的に向かって協力していることを伝え、クラス全員でどのように参加したらよいか話し合い、気づかせていけるようにする。 ☆友達同士で声をかけあったり、教え合ったりしている様子を認め、他の役にも気づかせていけるようにする。		
10:45	○今日の劇づくりで楽しかったことや頑張ったこと、次に生かしたいことなどについてグループやクラスで伝え合う。 ☆友達のよさを感じられるように、一人一人のがんばっている姿を認める。 ☆自分たちで一つの目的に向かって劇を創り上げていこうとしている姿を十分に認め、友達と力を合わせる楽しさを感じられるようにする。		*友達と協力して活動を進めようとしているか。 *演技を話し合ったり、工夫したりすることで劇づくりを進める楽しさを味わっているか。
11:00			*がんばったことや役の課題などを伝え合っているか。
観 点 の 評 価	<ul style="list-style-type: none"> *他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさを味わっているか。 *共通の目的を実現しようとしているか。*互いの思いや考えを出し合っているか。 *イメージを共有して活動を進めているか。*工夫し、協力して劇づくりに参加しているか。 		

VI 仮説の検証

1 これまでの活動と活動計画

時期及び月日 ○ねらい・内容	☆教師の援助 ●環境構成
12月 ○絵本や物語に親しみ、イメージを広げて遊ぶ。 ・自分のイメージを伝え合って、劇遊びを行う。	☆物語に対する一人一人の考えやイメージを丁寧に受け止めながら、クラスのみんなで共有できるようにし、さらに発想が広がるように話し合い、劇遊びが発展していく様子を見守る。 ☆劇遊びの中で、友達と共通のイメージを持ってセリフのやり取りをしたり、動きを工夫したりしてかかわりを楽しんでいる姿を認めていく。
1月7日～10日 ○友達のを考えを聞いたり、自分の思いを伝えたりしながら、劇づくりを進める。 ・役の友達と、セリフや動き・必要な道具・衣装などの考えを出し合い、話し合っ決めていく。	☆劇をどのように進めていくか、子どもたちが考えていけるように見守り、必要に応じて助言をしたり、子どもたちのアイデアをまとめたりする。 ☆幼児一人一人が納得して自分のやりたい役になれるよう、話し合ったり考えたりできる時間を十分に取、子どもの気持ちの変化にも対応して決められるようにする。 ☆幼児のちょっとした表現や思いつきを認め、思いやイメージを伝える楽しさが味わえるようにする。 ☆幼児一人一人の発想を大切に、それを伝えて実現する喜びが味わえるようにする。
1月14日～17日 ○個々のイメージを深めながら、友達と一緒に表現することを楽しむ。 ・友達とアイデアを出し合いながら、役をつくることを楽しむ。 ・友達と思いや考えを出し合い、イメージを共有しながら遊ぶ。	●それぞれの役が、落ち着いて話し合ったり、動きを演じてみたりできるよう、場所や時間を確保する。 ☆劇づくりの中で、一人一人の子どもが自分の考えを表し、実現していけるよう、教師も話し合いに参加したり、アイデアを伝えたりし、子どもの考えが活かされるよう援助する。 ☆劇を創っていく中で、必要なもの(大道具・小道具)を提案し合い、どんな感じにしたいか、材料などを話し合う。 ☆劇を創っていく中で、互いに工夫している様子や頑張っている姿を認め、思いを伝え合い協力して取り組む楽しさが味わえるようにする。 ☆一人一人が自分らしさを出しながら表現活動を楽しんでいるか把握し、苦手としている幼児や戸惑いを感じている幼児に対して、一緒に考えたり楽しんだりしながら、安心して取り組めるようにする。
1月20日～24日 ○グループの友達と共通の目的に向かって力を合わせていく。 ・友達よさを感じ、一緒にがんばろうとする気持ちを持つ。	☆友達と協力して活動に取り組む楽しさが味わえるように、目的やイメージが共通のものになるようみんなで確認しながら進めていく。 ☆一人一人の幼児が工夫し、自分の考えを実現していること、また、互いの考えを認め合っている点などを認めて協力して進めていく楽しさが味わえるようにする。 ☆劇全体の流れがわかり、イメージを膨らませて演じる楽しさが感じられるよう、登場人物の気持ちや状況に気付かせたり、一緒に考えたりする。
1月27日～31日 ○みんなで共通の目的を持ち、考えを出し合いながら劇づくりを進めていく。 ・友達と気持ちを合わせて取り組む楽しさを味わう。	●みんなのイメージを具体化しながら、一人一人が楽しく参加できるように常に話し合っていく場を設ける。 ☆子どもたちから出たアイデアを取り上げながら工夫していくことで、自分たちで創りあげる充実感を味わえるようにする。 ☆ストーリーのおもしろさを感じながら、セリフの言い方や表現の仕方を工夫できるように、友達同士で表現を見せ合ったり話し合ったりして楽しく遊びを進められるようにする。
2月3日～8日 ○友達と協力して、一つのを創りあげる楽しさを味わう。 ・自分の力を発揮して取り組み、満足感を味わう。	●音楽や小道具がいつでも使用できるように保育室や舞台を整えておく。 ☆幼児が自分の役に一生懸命取り組んでいる姿や仲間と協力している姿を認め、共に過ごす楽しさが味わえるようにする。 ☆幼児が緊張しすぎず、安心して自分の力を発揮できるように、クラスみんなで声をかけたり励まし合ったりして明るい雰囲気をつくり、発表を楽しめるようにする。

2 ビデオ記録とエピソード記述から幼児の姿を捉える

本研究では、研究テーマに沿った保育実践を行い、幼児の姿やその変容から検証を行う。その対象を「クラス全体」と「抽出児K」とした。

〈研究仮説〉

好きな遊びやクラスの活動において、互いに意見を出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを進めていくことができる劇づくりを楽しむことにより、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになるであろう。

〈エピソード記述の分析の視点〉

ア 他者とのイメージが共有されていく場面を捉え、その変容を描く。

イ 他者への関心(他者への思い、関心、考え、ふるまいなど)がどのように高まっていくかその変容を記述する。

入園当初の様子

〈クラス〉

進級児8名、保育所より入園14名、初めての集団保育1名、途中転入1名の計24名のクラスである。自己主張が強い子が多く、自分の思いや意見を通そうとして、言い合いやけんかになる場面が多く見られる。また、個人差があり、自分の主張を強くする子と、圧倒されて言えずにいる子の差が見られる。活発な子が多い反面、クラスの活動では落ち着かない子が多い。

〈K〉

5歳児1年保育の入園であるが、保育所に5年通っており、集団生活を経験している。入園当初より、好きな遊びを見つけて友達と遊ぶ姿が見られた。話を聞く場面では、落ち着かず、話を聞いていなかったり、友達とおしゃべりをしたりする姿が見られる。遊びの場面では、虫捕りや3輪車、製作など好きなことには集中して取り組む。しかし、友達と遊ぶ際に他者の思いを考慮せず、自分の思いを優先して遊びを進めていくことが多く、思い通りにならないと、大声で怒鳴ったり、仲間外れにしたり、時に手を出してしまうなど、友達とのトラブルが多い

● 1学期

「3輪車独占」

〈エピソード①〉

朝、登園し身支度を済ませると、毎日のように大好きな3輪車に乗っている。園庭中を駆け巡らせ、坂道のスリルを味わったり、友達と2人乗りを楽しんだりしている。長らく乗っているため、他の子どもも乗りたいとお願いしても、「今乗ってるから。」となかなか譲ろうとしない。木登りなどの他の遊びに移っても、木のそばに3輪車を止め、他の子が乗ろうとすると「ダメ。」と言って1日中独占している。他の子どももまだ、Kには強く言われると、言い返すことができずにあきらめてしまう。そこで、教師間で話し合い、停留所を設け、交換できるように促したり、クラスで話し合ったり、その場で仲立ちとなって話し合ったりしたがあまり効果が見られなかった。

〈考察〉

登園すると真っ先に3輪車乗り場に向かい、坂道のスリルを味わい、友達と2人乗りや競争、探検ごっこなどを楽しむ姿は、自分のやりたいことを十分に楽しみ充実しているように感じる。この自己充実や友達とのかかわりを認めながらも、相手の思いや立場に立って物事を考えるような体験を重ねていく必要があると感じる。自分の思いが先行し、自分の都合通りに進めていこうとする本児に徐々に相手にも思いがあることを気付かせていくようにしたい。また、周りの幼児も自分の思いを伝えていけるような援助をしていく必要がある。

「虫よけスプレー」

〈エピソード②〉

M子が「先生、Kが虫よけスプレーを返してくれない。」と私に訴えてきたので、Kを呼び、どうした

のか話し合いをすることにした。私が「M子が虫よけスプレーを返してほしいと言っているよ。」と伝えると、Kは「これ、Kの。見つけて拾った。」と訴えてきた。そこで私は、「見つけてくれてありがとう。でも、持ち主に返してあげよう。」と伝えるが、自分が拾ったから自分のものであるとなかなか返さない。ついに、M子は泣きだしてしまった。私は「見つけたからといってもらってはいけないこと。」「落ちているものは教師に持ってくること。」をKに伝えると、M子にしぶしぶ返した。

〈考察〉

Kは、自分に興味があるものや製作したものを他の幼児が持っているとき、欲しがり、自分の物にしようとするすることがあり、話し合いになることがあった。今回も、他の幼児が家から持ってきた虫よけスプレーがうらやましかったのか、自分の持ち物にしようとしたらトラブルである。

Kにとって、欲しいものがあると我慢ができず、友達をうまく説得し、自分の思うような解釈をして手に入れようとすることがある。教師は、他の幼児にも思いがあり、大切にしていることに気付かせ、友達が作ったものをもらったり、取ったりするのではなく、友達に教えてもらい、一緒に作るように促すが、今現在は、自分の思いばかりが先行している。まだ、自己主張ばかりが先行し、他人の思いや感情に気づいていないように思われる。

〈考察〉

1 学期前半のKの様子を見ると、友達と遊ぶ際に他者の思いを考慮せず、自分の思いを優先して遊びを進めていく様子が伺える。自分の使いたい遊具や用具を独占し、他の子が「貸せて。」と要求しても「ダメ。」と強い口調で言ったり、手を出してしまったりしてトラブルになることがあった。また、友達が製作したものに興味があると、それをもらったり、うばったりし、友達から「返してくれない。」「取られた。」とトラブルになることが多かった。さらに、友達が教えたり、注意するようなことがあると、怒って強い口調で反論したりするので、友達が言い返すことができず、我慢をしたり、避けることがあった。

一見するとわがままな行為に感じられるが、実は人と関わっていくようになるための過程であると捉えることができる。「モノを取る。」という行為は、その遊びに興味があり、その「モノ。」を得ることで、遊びに参加できていると思っているが、その「モノ」が手に入っても、実際は友達とうまくかかわることができず、遊びが衰退し、飽きてしまって「モノ」を平気で捨ててしまっていた。

これらのエピソードより、Kは、友達を一人の感情のある人としてではなく、「モノ。」と同じような感覚でかかわっていると推察することができる。自分が必要な時に利用し、相手の思いや考えがあることに気付いていない。協同性の育ちとしては、「① 教師など身近な大人に親しみ、安定し、しだいに人やものへの関心を広げる時期。」であると捉えられ、ものとじっくりかかわる経験が他者との出会いの機会をつくり、しだいに友達とかかわる楽しさを味わうようになると考える。

●2 学期前半

「心の葛藤」

〈背景〉

4月から1年保育で入園してきたSとKである。午前保育、預かり保育と1日ずっと一緒に過ごすことが多い。共通の友達が多いことや興味のある遊びが似ている(3輪車、虫捕り)ことで、一緒に遊ぶことが多いが、意見の衝突が多く見られる。

〈エピソード③〉

KとSは3輪車で二人乗りを楽しんでいる。ところが、どちらが3輪車の前に乗るかの取り合いになり、Sが担任に訴えた。「先生、Kが自転車貸せてくれない。」、Kは「Kが最初に乗っていたんだよ。」、Sは「Sは前に乗ってないよ。ずっと後ろばかり。」と運転を変わってほしい様子である。担任は「K、Sが乗りたみたいだよ。どうしたらよいか2人で相談してごらん。」と声をかけた。すると、Kは、何も言わずに3輪車から降り立ち去ってしまった。そこでSはKを気にしながらも3輪車に乗り込み走り出す。私はどのようにするのかと思ひ、しばらく様子を見かねてみることにした。

Kは園庭の壁にもたれたり、鉄棒によりかかっていたりしているので、様子が気にかかり、声をかけた。「どうしたの?」、Kは「Kが先に自転車乗ってたのに、Sが横取りした。」とまだ納得がいかない様子である。そこで「話し合いしてみたら。交換しようって言うてみよう。」と誘うが黙ったまま、ガジュマルの

木に行ってしまう。そこで、木登りをし、うさぎのところへと移動した。そこでうさぎにえさをやり、水を交換してあげるなどうさぎの世話をを行う。「先生、手から(えさを)食べたよ。」「水も飲んだ。」と嬉しそうに伝えてくる。私も一緒に微笑みを返した。Kは園庭を回り、うさぎをかわいがることで気持ちを切り替えているのかなと思ひ、何も言わずに寄り添った。しばらく、うさぎの世話を楽しんだKは再び、3輪車のところへ行き、「俺にも乗らせて。」とT児に頼む。そこへ2人乗りを楽しんでいたSたちが「K乗っていいぞ。と声をかけてきた。Kは嬉しそうにそれに乗り込み、「T児、一緒に3輪車で遊ぼう。行こうぜ。」と2人楽しそうに園内を走り出した。

〈考察〉

これまでKは自分の思いばかりが先行し、相手のことを考えず、譲らずに乗り続けたり、奪ったりするなど、人をモノと扱うかのような態度が見られることがあった。「3輪車にまだ乗っていたい。」が私や担任に言われてこともあり「譲らないといけない。」という心の葛藤を感じることができた。これまでは自分の思いを強く主張し、なかなか譲ろうとしなかったり、友達にきつい言葉を使ったりしていたKであるが、あまり納得がいかない様子ではあるが、3輪車をいやいやながら譲ったところは成長を感じることができる。園庭を巡り、木登りやうさぎの世話をすることで、気持ちを落ち着かせ、心の整理を自分なりにしているように思えた。私は、当初、いじけて去ってしまうのではなく、話し合っ解決してほしいと考えていた。しかし、すぐに解決させようとせず様子を見守ったことで、Kの心の葛藤、気持ちの調整する場面を捉えることができてよかった。まずは、幼児自身に考えさせ、すぐに踏み込むのではなく、見守り、心に寄り添う援助の大切さを実感した場面である。このKの心の葛藤、育ちをクラスの活動で伝えることができなかった。このような心の育ちをクラスで話し合うことが、Kや他の幼児の成長につながると思われ取り上げていくことが大切であると考えた。

「葉っぱの船」

〈背景〉

- ・前日に仲の良い友達Tが行っているのを見て、仲間に加わり、続いている。
- ・入園当初から池に興味を持ち、廃品を浮かべたり、池の中の生き物を眺めたりしている。

〈エピソード④〉

KとS子が何種類かの葉を集め、池の近くで船を作っている。そこへ、NやAなど、数人の友達が「仲間に入れて。」と遊びに参加してくる。Kは「いいよ。」と受け入れ、「あちの葉っぱで船作って、ここに並べて。」と説明していた。Nは葉っぱで作った船をKに見せている「K、これでいい?」「大丈夫。ここに並べて。後で浮かべるから。」、どうやら、何艘も並べておいて、後でみんなと浮かべるようである。Nは「先生、今日のK、やさしいよ。」と嬉しそうに教師に寄ってきた。「どうして。」と尋ねると、「大丈夫って言ってくれたから。」。どうやら、快く仲間に入れてもらったこと、自分の船を認めてくれたことがうれしかったようである。Aも「K、こんなのでもいい?」と見せにやってくる。Kは、「大丈夫、かっこいい。」「恐竜のステラゴドンみたい。」と製作した船をほめている。Aも嬉しそうに微笑んだ。しばらくして、作った船をSが持ってきて、「浮かべていい?」とKに尋ねている。初めKは、「ダメ、みんなで浮かべるから。」「俺が船長だから、俺が決める。」と断っていた。しかし、「浮かべたい。」という何人かの訴えに、「じゃあ、沈まないか試してみて。」としだいに相手の思いを受け入れる姿が見られた。その後も「何やっているの?仲間に入れて。」と遊びに興味を持った友達がやってくると、「いいよ。」と受け入れて遊びを進めていた。



しばらくして、「片付けだよ。」と知らせに女の子たちがやってくる。Kは「ここに置いておくわけにはいかないから、誰も見つからないところに置いてこよう。」と周りに提案する。私は、近くにあった積み木(薄く細長い)に並べたらと促した。作った船を並べ終わると、「どこに持っていく?」と相談しながら移動させている。「みんなの船。」と嬉しそうにKは積み木の先頭を持ちながら、「これみんなに見せに、お部屋まで持っていこう。」と言っている。みんなで運びながら、近くの友達に自慢げに見せ、「船が通ります。」と運んでいる。靴箱に到着すると、「ここをもっておいて。」と代わる代わる上履きに履き替える姿

や、階段では、「ここ、気をつけろよ。」「(積み木を)まっすぐやったらどう？」と平行に持ち上げるとこぼれおちないことなどに気付き、それぞれに思いや考えを伝え合っている。

部屋に到着すると、「どこに置く？」と相談が始まり、Kが「濡れてるから、お日様で乾かそう。」と伝え、「それ、いい考えだね。」とテラスに並べた。

〈考察〉

Kは、気の合う友達が遊んでいる様子から自分の中にイメージを取り込み、友達と一緒にイメージを共有して遊ぶ楽しさを味わうようになってきている。これまであまりかかわりのないNやクラスの仲間を受け入れる姿は、これまで自分だけ楽しみたい思いから、友達と一緒に遊ぶことを求め、楽しむ姿へと成長を感じることができる。さらに、友達が作って持ってきたものを認めたり、葉っぱがある場所を教えたり、さらに、転んだ友達を心配したりする場面も見られた。これまで、自分の思いを主張しトラブルになることが多かった場面においても、友達の提案を受け入れながら遊びを展開し、友達の思いを受け入れるやさしさなどが身に付いてきている。頭ごなしに威圧的にかかわる姿から、イメージを共有し、いろいろな友達と一緒に活動する楽しさを味わい、受け入れられる喜びを味わっていると考える。周りの友達も受け入れてもらった嬉しさを感じ、また、Kにとっても受け入れられた喜びを味わう相互作用の中で、協同する楽しさを味わっていると考える。

『ガンピーさんのふなあそび』

〈エピソード⑤〉

クラスの活動で、『ガンピーさんのふなあそび』の劇遊びを行った。大型積み木で船を作り、絵本を見ながら、劇を展開した。Kは「俺は船を漕ぐ人。船長。」といったので、KとR子、Lにガンピーさん役をお願いした。話が進んでいき、4人が最後まで好きな動物が決まらずにいた。そこで私は「絵本以外の生き物で何かやりたいものある？」と問いかけてみた。すると、「熊は？」「チーター？」「トラ？」など様々な動物が周りの子が提案する。Kは「チーターとかトラとかダメ。」と否定的である。R子は「いいさ。」L「チーターはダメ。走るのすごいさ。」R子「でも走らなければねって言えばいいさ。」H子「カバは？」、K「カバはダメ。」、R子「重たくてボヨってなるよ。(船が傾いてしまう)。」、H子「狼は？」、M子「(うさぎ役なので)狼にたべられちゃう。」などと考えを伝え合いながら劇遊びを進めている。最後まで動物が決まっていなかったAが「チーター(やりたい)。」と言うと、Kが「ダメ、走るから。」H子「チーターは何でも食べるよ。」、R子「走ったり、食べたりしたらダメだよって言えばいいさ。でみんなが納得する。Aがチーター役で動き出すとクラスのリーダー的存在のNが他の3人にも「一緒に行って。」と後押しすると嬉しそうに他の3人も一緒に動き出した。一通り劇が終わるとR子が「面白かった、またやりたい。」N「先生、船壊れてるけどどうするの？」R子「直してからお家を作りたい。」という意見から、船がガンピーさんの家と変化し、そこで弁当をいただくこととなった。

〈考察〉

絵本を手がかりに、クラスで互いの思いや考えを伝え合いながら、イメージを共有している。物語の内容を共有することを通して、仲間への関心が広がっている。これまであまり自分の意思や考えを伝えることが得意でない幼児が友達の助けを借りながら、自分のイメージを伝えるようになってきている。また、「気の合う友達と一緒になら。」と友達との仲間関係が育っていることで、自分の考えをうまく伝えることが苦手な子も一緒に参加でき、クラスで活動する楽しさを味わうことができたと考えられる。物語の内容そのものを、幼児が生活や遊びの流れそのものにし、人とかかわって遊ぶ楽しさ、イメージや目的を共有し、実現する楽しさを味わうことができている、劇づくりはストーリーがあることで、そんな遊びが展開でき、人間関係形成に大きな影響を与えることができると考える。

Kは、当初は、劇の内容にこだわり友達の意見に否定的であったが、R子やクラスの意見に耳を傾け、受け入れるようになってきている。「劇づくり」という遊びを展開する中で、仲間への関心が広がり、しだいにイメージを共有し、協同して遊ぶ楽しさを味わうことができた。自己主張を繰り返しながらも、友達の考えに触れ、互いの思いを伝え合いながら折り合いをつけることを劇づくりで味わっていると考える。

〈考察〉

2学期になると、運動会という大きな行事を経験し、一回り成長をした子どもたち。Kも同様に人とかかわりにおいて、挫折や葛藤、喜びなどを味わい、成長していることを実感することができる。1

学期前半は、3輪車や虫捕りなど、好きな遊びをじっくり取り組む中で、友達やものへの関心を広げる時期であった。後半になると、場や雰囲気などを共有して友達と遊ぼうとするが、自己主張が強く、友達の思いや考えに気付くことができずに嫌な思いをさせることがあった。2学期頃になると、周りの友達も成長し、これまで言いなりだった友達もしだいに自分の思いや考えを表すようになり、これまでのようにはいかなくなかった。これまで独占していた3輪車や虫捕り網などの道具の取り合いが起こり、自分の思い通りについてきた友達が思うようにはいなくなり、自己主張がぶつかり合い、挫折や葛藤など、様々な感情体験を味わうようになった。それを乗り越えようと11月頃は、一人で心を落ち着かせ、気持ちを調整する場面が見られた。12月頃になると、様々な葛藤を乗り越え、気の合う友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを味わうようになり、自分の思いを發揮したり他者のよさがわかったりして、協同する楽しさを味わうようになってきていて、確実に成長していることが感じられる。本人の体調などにより感情の波があり、週明けなどは、友達とのトラブルが多く見られ、友達や教師の話聞き入れることができず、気持ちの調整に時間がかかるが、日を重ねるごとに落ち着きが見られ、やり取りを通じて、言い合いになる場面も少しずつ減り、鋭い目つきもやわらかくなり、トラブルの話し合いでもすこしずつではあるが、聞き入れようとする姿や気持ちの切り替えが早くなっているように感じる。

● 2学期後半

1月7日～10日	「ストーリーづくり」
<p>〈エピソード⑥〉</p> <p>2月に幼稚園で行う『生活発表会』についてクラスで話し合いを持った。去年の様子や以前の保育園の話などでイメージを持たせることで、自分たちが披露したいものを伝え合い、Kから「劇をやりたい。」という提案があった。教師がどんな劇にしたいのかと質問すると、KとCは好きな遊びで忍者ごっこを楽しんでいることから「忍者。」、他の子から、「おばけ。」「魚。」「人魚姫。」などと様々な提案があった。そこで、どんな内容にするか相談すると、Kが「忍者が宝物を探しに行つて…。」Cが「おばけとか出てきたら。」、N子が「(話を)くっつけたら。宝物は海の底の砂に隠している。」などと話が広がる。「おばけを倒してから宝物をゲットする。」「おばけが砂の中に隠してある。」「おばけは怖がらせる。」「忍者が海に潜つて人魚姫を助ける。」「宝物は何にする。」「ダイヤモンドとか、ネックレス、コインとか。」とイメージや考えを伝え合っている様子が見られた。しばらくすると配役の話になり、「人魚姫役。」が決まらない。すると、Nが「Pさんやらない？」という話し合いになり、Pも受け入れた。ほとんどの幼児がやりたい役が決まるが、4人がまだ決まらない。そこで、「何かやりたい役ある？」と質問すると、しばらく考えたTが「海賊。」と伝えてきた。海賊と忍者が仲間になり、敵から人魚姫を助けにいきたいらしい。さらにCが「おばけの船に助けに行く。」と付け加えた。</p>	
<p>〈考察〉</p> <p>この時期になると、自分のイメージや考えをしっかりと伝えることができるようになり、自己發揮していることが伺える。自分なりのイメージを相手に伝え、相手のイメージや考えも聞き入れることで、さらにイメージが広がり、共有していく。これまであまり自分のイメージや考えを伝えることができないでいた子も自分の興味・関心に合致したことや様々な経験を重ねたことが自信となり、イメージを伝え合う様子が見られる。これは、好きな遊びや生活において自分の思いや考えを伝え合う経験を重ねていることや普段から自分の思いや考えを伝え合う場面を大切に、相手に思いや考えに気付かせていくような話し合いを重ねていること、12月に『おおきなかぶ。』や『ガンピーさんのふなあそび』の絵本で劇づくりを行い、イメージを共有し、互いの思いや考えを伝え合い、受け入れながら劇づくりを行ったことなど、幼児たちが、自己主張し合い、折り合いをつけて遊びを進めていく経験を繰り返し重ねたことでできるようになっていると考える。</p>	



「リーダー争い」

〈エピソード⑦〉

劇づくりのストーリーの話を進めていると、海賊チームが『船長』を決めることになり、忍者チームも『リーダー』を決めることになった。どのように決めるか話し合った結果「じゃんけん。」で決めることになったらしい。初め全員でじゃんけんし、勝ち残ったKとR子が決戦すると、Kが後出しをして勝った。すると、R子が「後出ししたからインチキだよ。」と言い合いになるが、聞いてもらえずに泣き出してしまった。そこで、私が理由を聞くと、R子が「Kはインチキだよ。後出しして。」、K「後出しじゃないし。」と怒った口調で言い放った。E子が「じゃんけんをしてKが負けて、R子が勝ったけど…。」と話したので、私は「では、今日はR子がリーダーだね。」と言うとKが「本当は俺が勝ったんだよ。R子いんちき…。」と悔しそうである。するとCが「2人でリーダーしたら。男リーダーがKで、女リーダーがR子。」。Kは「わかった。」と納得するが、しばらく考えたR子は「Kに譲る。」と言い出した。教師は「2人で一緒にやったら。」や「R子が勝ったからR子がやったら。」と説得するが、譲るという意思が固かった。私はKにR子がやりたい気持ちを抑え、譲ってあげたことを伝えた。

〈考察〉

どうしても自分の思いを優先するKである。私もKが我慢する場面も大切と感じ、R子をリーダーにするが、一度気持ちが折れてしまったR子は自分からリーダーを辞退した。KなりにR子の気持ちを察したのか、または一緒にリーダーができると思ったからなのか、「一緒にやる。」という提案を受け入れた。私はKの「やりたい。」という意欲を受け止めながらも、相手が辛い思いをしており、時には我慢する自己抑制にも気づかせていく援助が必要であることを感じた。R子や周りの幼児(Kの身近にいる)にもKに押されるばかりでなく、時に教師が壁となり、立ち向かう勇気を与えることも必要であると考える。

1月14日～17日

「クラスの様子」

劇のストーリーに合わせながら、各グループがセリフや動作のイメージを出し合いながら演技を行っている。場面ごとに教師の「何て言う。」の質問に、「あ一言おう、こうしよう。」と伝え合う様子が見られる。初めは、お互いが自分のイメージでセリフを発するのでバラバラになってしまい、「こんなじゃない。」などと話し合ったり、発想が豊かな子が発したセリフに乗っかりながら、フリを付けくわえたりする姿が見られた。幼児同士で伝え合うよりも、教師に伝えてくる様子が多く見られたので、話し合いに参加しながら、自分たちで話し合っていけるような援助を心がけることで、徐々に自分たちで進められるようになってきた。戦いの場面では、戦いごっこに夢中になってしまい劇に参加できない友達に、「皆でやらないの？」などと声をかける様子が見られた。役ごとに仲良くなると、お喋りをして、笑って演じる姿が見られるようになると、「ねえ、海賊グループ笑わないで。真剣にだよ。」や「次は魚役のセリフだよ。」「Kたち、けんかしないで。」などと自分たちで教え合ったり、注意し合ったりなど、自分たちで協力して劇づくりを進めていこうとする姿が見られた。



「N子の育ち」

〈背景〉

N子は年中から在籍しており、面倒見がよく、誰にでも優しく接することができる幼児である。クラスの活動などでは、教師の質問に答えたり、発言をしたりする積極的な姿が見られる。しかし、嫌な思いをしても教師に伝えず我慢をし、どこか自信がもてないでいる様子が見られる。

〈エピソード⑧〉

クラスの活動後にN子が「Kが何もやってないのに押しよった。」と私に伝えてきた。そこで、Kにも理由を聞こうと3人で話し合いを持った。N子によると、劇づくりが終わり、水道のところへ手を洗いにいこうとすると急にKが押してきたらしい。どうして押したのかKに理由を尋ねると、立ち上がろうとしたときにN子が手を踏んでしまったらしく、それが痛くてやり返しとしてN子を押してしまったらしい。そこで、私は、お互いに痛い思いをしたことやN子はわざとではないことなどを伝えた。N子は

「K、手を踏んでごめんね。」と謝った。私はKも押ししてしまったことを謝ってほしく「Kも伝えることがない？」と話す。黙ったままである。しばらく促すが沈黙が続く。Kが拒否反応を起こした(教師に触るな、などと言う)ことや次の活動(おやつ)にNも行ったそうにしていたので、「心の整理をして後で伝えるといいね。」と両者に確認をとり、その場を去った。その後、担任から「謝っていましたよ。」と連絡があった。

〈考察〉

活動後にぶつかってきたKに対し、普段は温和な性格のせいかわ「大丈夫。」と我慢している場面が見られていたが、今日は教師に訴えてきた。これまでは、どこか自分の行動に自信が持てなかったのか、教師に伝えるとまずいと思っていたのか、伝えずにいた。私は困ったときはいつでも話してよいことをその都度伝えるような援助を心がけていた。自分の思いやイメージを伝えやすい劇づくりを行うことで、積極的に発言することができ、自分の思いや考えが受け入れられる経験が、これまで教師に訴えることを躊躇して我慢することがあったトラブルの場面においても、自分の思いや考えを伝え、立ち向かっていく場面につながったと考える。この話し合い以降、N子はさらに自信を持ち、保育参観の日に劇づくりの途中から演じたいという教師の発言に対し、「(お母さんが来ているから)初めから見せたい。」や役の変更をお願いした時に「魚役にはN子がいなくて。だって声が1番大きいから。」など自信を持ち、主体的な行動が見られるようになっていく。



「真剣にだよ」

〈エピソード⑨〉

魚と海賊たちが船で人魚姫を探して航海をして場面で、お喋りをして少しふざけた様子で演技を行っている時、忍者役で出番を待っていたKが「魚と海賊たち笑わないで。」「真剣にだよ。」と伝える場面が見られた。また、自分たちの忍者役『術』を披露する場面では、Cに「こんなするんだよ。」と演技を教え合う様子があった。

〈考察〉

普段からごっこ遊びが好きで、忍者ごっこを楽しんでいるKは、劇づくりに興味を示し、意欲的に取り組む姿が見られる。前日は体調のせいで、ふざけることがあり、海賊役のAに「KとCは遊んで忍者やらないの？」と注意されたことを覚えていたのか、今日はスタートから真剣に取り組む様子が見られたが、この日は、「劇をつくる。」という共通の目的に向かって、協力していこうとする姿が見られる。さらに、同じ役の友達に自分のイメージを伝え、一緒に活動を行う楽しさを味わっている。

『術』をめぐる

〈エピソード⑩〉

劇の中で、おぼけと忍者が戦いを行う場面で、忍者が『術』を披露することとなった。それぞれに披露したい術があるらしく、互いに披露しあっている。術を披露する中で、仲間同士で戦いごっこが始まり楽しんでいた。翌日、術を披露している場面で、R子が「R子が雷の術だったよ。」とKに訴える。Kは「違うよ。」と言いつつ言い合いになったので、私は「2人で力を合わせてやったら。」と伝えるがR子が納得いかず『水の術』に変更することとなった。さらに、別の日には、Cが行っていた『ドリルの術』をKが披露する場面が見られた。Cが「これ俺の術だよ。」と伝えると、「お前、別のやれ。」とKが言ったので、私は「横取りはダメじゃない。」と伝えるがCが「いいよ。俺は剣の術にする。」と言って新しいアイデアを出し披露することとなった。

〈考察〉

役ごとにセリフやフリを考え、互いのイメージを伝え合って劇づくりを進める様子が見られている。忍者役においても、忍者のイメージや目的を共有し、それを実現しようと、自己主張をぶつけ合いながら協力して進める様子が見られている。術を披露する場面では、友達と同じ術となり言い合いになる場面や、友達のおもしろい術をと自分のものにしてしまう場面が見られた。私はその都度、「どっちがやる?」「いっしょにやったら。」と折り合いを付けたり、協力したりできるような言葉かけを行ったが、

結局K以外の幼児が折り合いをつけ、Kの思いが優先されることとなった。毎日の生活経験の中で、周りの子が合わせている現状が見られる。Kにとっては居心地のよい場所になっているが、友達の思いに気づき、K自身が折り合いを付けていく場面を必要であるように考える。

1月20日～24日

「クラスの様子」

劇の全体の流れをつかんできた子どもたちは、場面ごとのセリフがわかり、友達と声を揃えるために「せーの。」と伝え合い、フリを合わせようと小声で相談している姿が見られている。忍者役はたまたま一人の幼児が側転したことから、全員が側転できることがわかり、登場シーンに加えたり、海賊役は鉄砲チーム、剣チーム、指示を出す旗の係に分かれたり、船で出発するシーンでは海賊の船長であるAが「出発！」と声をかけ、乗組員、魚、忍者たちが「オー！」と返事をするなど、工夫して劇づくりに取り組んでいる。先週話し合った小道具づくりも始まったり、イメージに合った曲などを見つけて劇の中に挿入していったりすることで、イメージや共有しやすくなっているようである。しかし、劇の流れを把握したことで、自分の役以外の場面ではお喋りに夢中になってしまい、道具を持って演技をすることで、それを使って遊んでしまい、他の演技の邪魔をしてしまうことがあり、全員で共通の目的に向かって劇を創りあげていくという感覚が薄れてしまっている。

「Aの主体性」

〈背景〉

Aは水疱瘡でしばらく園を欠席していたため、劇づくりの話し合いに参加できなかった。担任とも話し合い、Aは以前の誕生会で司会を上手に務めたことから『ルーター』はどうかと話し合っていた。Aにどのように参加したいか話し合うと「海賊がやりたい。」ということとなった。持ち前のリーダー性で船長となり、「こんなセリフを言おう。」「こんなフリをしよう。」といろいろなイメージを出し、周りの子に教えたりするなど海賊役をひっぱりようになった。また全体の場面でも「K、Cは一緒にやらないの?」「みんなで一緒に言うから並んで。」などと声をかけたり、忍者役の側転の登場に「すごい、忍者っぽい。」など認めたりする姿などが見られた。小道具づくりの場面では、「(絵が上手なので)Tは地図描ける?Kは鉄砲と剣を作るよ。」と役割分担をして取り組んでいる。



〈「エピソード⑩」〉

おやつの時間になり、クラスでは手を洗い、イスやテーブルを出すなど、準備にとりかかっている。Aはこの日、当番であり、当番活動を行っている。テーブルを拭いて牛乳を取りに行こうと並んでいた。そこへ、同じく当番活動を行っていたKが横取りし、Aの前に並んだ。以前は見逃すこともあったが、今日は、自分が先に並んでいたことや順番を守らないといけないことなどをKに強い口調で伝えている。Kもその口調や勢いに圧倒されたのか、しぶしぶ1番後ろへと並びなおした。

〈考察〉

これまでKは、自分の思いを強く主張することから横取りをしても周りの子は我慢することがあった。気付いた時は私が声をかけ、気付かせるような援助を行っていたが、「Kだから譲ろう。」のような雰囲気クラスにあった。普段から温和であるAは誰からも好かれ一目置かれている存在である。Kに対してもそのようである。Aは水疱瘡の為にストーリーの話し合いには参加できなかったが、劇づくりに興味を示し、積極的に活動に参加した。普段からグループを引っ張る姿が見られ、劇づくりでの海賊役でも積極的にグループをまとめ、自分の思いやイメージを伝えて、劇づくりの中心となっていることがさらに自信へとつながっているようである。今日の出来事において、以前ならAも譲っていたかもしれないが、劇づくりにおいて、積極的にグループやクラスの友達に考えを伝えたり、まとめたりすることでの自信が、Kに対しても「順番を守らないといけない。」ことをしっかりと伝えることにつながったと考える。KもAの勢いやしっかりと理由を説明する姿に圧倒され、折れることができ、よい体験につながった。

「クラスの話し合い」

〈エピソード⑫〉

劇の練習後、クラスでどのように進めていけばよいか話し合った。教師が指示を出していること、グループでセリフを合わせるために「せーの。」と言っていること、D子の話である。

教師が指示を出していることでは、Kは積極的に話し合いに参加し、「自分の出番以外の時は、友達のセリフを聞いて、自分の出番の時にすぐに言えるように準備しておく。」や、「『せーの。』と合図を送るのではなく、みんなで声を合わせる。」などと述べた。周りの幼児も納得したような顔で発表する様子を見守っていた。

〈考察〉

私は劇を教師主導ではなく、自分たちで考え、主体的に進めてほしいと願っているが、劇づくりも中盤に入り、中だるみしているのか、おしゃべりなどをしてセリフを言うのを忘れてしまう場面が見られた。また、役ごとに力を合わせてセリフを言おうと「せーの。」と言うことに違和感を覚えた。そこで、クラス全体で考えを伝え合うよい場面と捉え話し合うことにした。入園当初は、クラスの集まりになかなか参加せず、好きなことばかりをしていたKであったが、今ではクラスの話し合いに参加し、主体的に考え、発言しているところに成長を感じる。劇づくりに興味・関心があり、みんなで協力して活動を進めていこうという意識が伺える。そんな様子を見て、周りの友達も「顔を見て、目を合わせて言う。」など、Kの発言に賛同して話し合いに参加する姿が見られた。



「側転できるよ」

〈エピソード⑬〉

劇づくりを進めていると、忍者の登場シーンでいつも歩いて登場する姿が見られた。そこで、どんな風に登場すると忍者らしいか私が問いかけると、Sが「俺、側転できるよ。」と伝えてきた。他の子も「俺も。」「私も。」と全員ができることがわかり、Kが「みんなで側転で出よう。」と意見が出て、側転で登場することとなった。Cは「前回りも入れたい。」と側転と前回りで登場することになった。しばらく練習をしていると、後頭部を向けて側転をしていることに気が付いたので、忍者役は下手側から登場することになった。しかし、Kだけが他の子たちとは逆であり、どうするかと話し合いをすると、「Kだけ逆から出る。」と本人が話し、Kのみ上手側から登場することとなった。

〈考察〉

クラスでは「側転。」が流行っていて、Sの「側転できるよ。」の何気ない発言から、周りが受けとめ、登場シーンに取り入れることになった。さらに練習を重ねるごとに、さらにおもしろいものにしたいCは、前回りを取り入れ、私が「顔が見えた方がいいのでは？」の問いかけに、Kは自分だけ逆方向から入場することにした。これまで忍者グループは出番が1番最後ということもあり、落ち着かないことがあったが、入場シーンができたことで意識が変わってきた。特にKは一人で待っているということもあり、意識して登場を待つ様子が見られる。

1月27日～2月8日(検証保育1月28日)「クラスの様子」

劇づくりも終盤に入り、この週からは本番やリハーサルを意識し、衣装を着て劇づくりを行うことで、グループの意識が高くなった。これまで、リーダー的な友達に付いていく感じの幼児たちも練習を繰り返すことで、大きな声を出せるようになったり、笑顔で演じたり、新たなセリフやフリを付け加えるなど、自信を持って演じるようになってきた。しかし、劇がパターン化してしまったことで、通し稽古のようになってしまった。役ごとにはイメージを共有し協力する姿が見られるが、他の役を意識し、クラス全体で一つの劇を創りあげているという意識までには至れなかった。



当日は、前々日まで3日間園閉鎖ということもあり、欠席者が居たことや、最後の週に十分な練習を行えず、クラス全体で一つの劇を創りあげるという意識を持たせる援助が行えなかったが、役ごとに協力して何とか演じることができた。

〈考察〉

Kは日常から絵本が好きであり読み聞かせを喜んでいた。最近、好きな遊びの中で『忍者保育』というごっこ遊びを楽しんでいたことや、12月に劇遊びを行った経験、保育園の経験で劇を行った経験があったことで、2月の発表会のクラスの出し物で「劇をしたい。」ということにつながったと考える。話し合いでは、KやC、N子を中心に、互いのイメージを伝え合い、受け入れながらストーリーを創っていき、「忍者は『にんじゃのおにぎり』の曲を使おう。」、衣装は「全部黒に草履履きたい。」など、自分のイメージをしっかりと持っており、そのイメージを友達や教師に伝えて劇づくりに取り組む姿が見られる。他の役がおしゃべりや笑いながら演技をする姿に「笑うな、真剣にだよ。」などと伝え、自分の行動に自信を持ち主体的に劇づくりに参加している。Sが「側転で登場したい。」という考えに賛同し、自分だけ別の場所からの登場でも、しっかりと出番を待っていた。劇づくりを通して、自分に自信を持ち中心となって役作りに励み、友達のアイデアも取り込みながら協同して遊びに取り組んでいる。

3 検証のまとめ

(1) クラス・Kの変容

劇づくりを行うことで、クラス全体で共通の目的を持ち、役ごとにイメージを共有し、実現しようと、自分の思いや考えを相手に伝え合ったり、聞き入れたりしながら折り合いをつけ、工夫したり、協力したりして劇づくりに取り組む姿が見られた。役を演じることで、自分の思いを伝え合い、話し合い、あたらしいセリフやフリなどのアイデアを生み出したり、助け合ったりするなど、力を合わせて協力する姿が見られた。時には、自分の考えが受け入れられなかったり、ふざけてしまって注意されてしまったり、言い合いになってしまうなどの様々な葛藤体験をし、多様な感情体験を重ねてきた。とくにKは、入園当初は自己主張ばかりしていたが、生活を繰り返す中で、様々な葛藤や挫折を味わい、乗り越える中で、イメージを共有して遊ぶ楽しさを味わうようになった。エピソード①では、自分の思いだけを優先し3輪車を譲ることができなかったが、エピソード③になると、葛藤し、教師の手助けを借りながら譲り、乗り越えることができるようになった。トラブルの場面においても、入園当初はなかなか謝ることや、自分の気持ちをコントロールすることができず、立ち直るまでに長時間かかったが、少しずつ友達に謝る姿や、友達の思いや考えを少しずつ聞くような態度を見られるように変化している。製作遊びなどにおいても、始めは友達の物を欲しがり、もらったり、時に奪ったりする様子から、9月ごろになると一人でじっくりと取り組み、友達に認められた喜びなどを味わい、エピソード④では、友達と一緒に遊びを楽しみ、受け入れたり、受け入れられたりと相互関係を楽しむようになっている。エピソード⑤では、物語のイメージの共有の中で、互いの思いや考えを伝え合い、折り合いをつけ、友達の考えも受け入れながら、劇づくりを楽しんでいる。エピソード⑥以降の生活発表化に向けての劇づくりでは、普段の好きな遊びで友達とイメージを共有して遊んでいる「忍者ごっこ」を取り入れたことで、興味・関心が高まり、自分の思いや考えを伝えて参加することができた。エピソード⑦や⑩では、友達と思いをぶつけ合い、⑨や⑫では、的確な発言で、クラスのリーダー的な存在になっている。劇づくりを通して、友達に教えたり、協力したり、時に客観的に物事を見たりなどの育ちが見られたが、自分の思いを優先し、他者を理解し折り合いを付けていく点には課題が残り、今後も援助が必要であると考えられる。

(2) 教師の援助

幼児が互いの思いや考えに気付き、互いの思いを伝え合うようになるための教師の援助において、幼児同士の思いをつないでいくことがとても重要であることを劇づくりや日常の生活の中で、改めて実感することができた。入所前は、Kに対し、思いを受け止めかかわっていたつもりであったが、「友達にやさしくしなさい」と大人視点のかかわりが多かったが、ビデオ視聴やエピソード記述などの検証を重ねる中で、かかわりが変化してきた。エピソード③では、教師が仲介に入るのではなく、見守り、寄り添う援助を行ったことや、ビデオ記録、エピソード記述を行ったことで、K

の心の葛藤や気持ちの切り替えなどの心の育ちに寄り添うことができた。Kにとって、他の幼児や教師に受け入れられた経験が実は大切であり、その日常生活における経験が、エピソード④の友達を受け入れる経験につながったと考える。エピソード⑥以降の劇づくりにおいても、教師が幼児の立場に立ち、その幼児の調子に合わせて考えることの大切さを学んだ。一人一人の発達の課題を踏まえ、ただ見守るだけでなく、折り合いをつけていくために共に考えていくことのできる援助や他の幼児の思いにも気づかせていくことができるような援助を心がけることが大切である。幼児の行動に温かい関心を寄せ、葛藤などの心の動きに沿って、寄り添い共に考えていく必要性を劇づくりや幼稚園生活の中で味わうことができた。幼児一人一人の言動で、意図や欲求などの内面の動きを捉え、受容し、幼児自らが考える姿を見守りながら、教師も共に考えていくことが重要であり、教師が幼児の心に寄り添い、心と心を通わせる経験が、しだいに幼児同士の心と心のつながりとなり、人へのやさしさや思いやりにつながっていくと考える。

(3) (3) 劇づくりの有効性

劇づくりは、このような心が育つ経験を多く含んだ活動である。領域「言葉」や「表現」のねらいや内容を多く含みながらも、劇を創っていく中での人間関係の育ちが多く見られる。自分の思いやイメージを自発的に表現する中で、様々な葛藤体験がおこり、工夫したり、協力したり、試行錯誤を重ねながら一緒に実現に向かおうと乗り越えていく体験を重ねていく。みんなで活動を楽しみ、時に失敗なども味わい、いろいろな感情体験をしながら、共通の目的が実現し、その喜びを十分に味わうことができると考える。個人の自己発揮から役ごとのグループの育ち、そしてクラス全体での協同する経験へとつながっていく劇づくりは、保育の集大成であると考えられる。

今回の劇づくりでは、多くの個の葛藤や育ちを感じる事ができた。Kをはじめ、AやN子、D子のエピソードを記述したが、それ以外にも多くの子の育ちをビデオや記録で確認できる。また、役ごとのグループの育ちも感じる事ができた。ほとんどの役が仲のよい友達同士であったことから、互いに伝え合い、自己主張しながらも折り合いをつけ、協力して進めていきやすかったと考えられる。しかし、グループから全体への育ちを考えると十分な育ちを保障できずに終わってしまった。グループ同士では、イメージを共有し、協力して取り組んでいるが、全体の劇の構想ではこれでよかったのか、他の役から見た役ごとの役割など、客観的な立場に立った援助、劇全体を見通す援助を十分に行うまでには至らなかった。また、クラスの中には『劇づくり』という『演じること』を苦手とする子への幼児理解、十分な援助を行えなかった。しかし、保育において劇づくりが人間関係の形成や幼児の発達において有効であることがわかった。今後さらに研究を深め、課題改善を図り、保育に生かしていきたい。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 互いに意見を出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを進めていく劇づくりを楽しむことにより、友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになってきた。
- (2) 友達の思いや考えに気づき、互いの思いを伝え合うことができるようになるための教師の援助や幼児理解が深めることができた。

2 今後の課題

- (1) 工夫したり協力したりして取り組む「劇づくり」における、幼児期の発達段階を考慮した活動計画や指導計画を作成する。
- (2) 幼児理解を深めるための日常の記録の取り方を工夫する。

〈主な参考文献〉

- 勅使千鶴 亀谷和史 東内瑠里子著 2013 『「知的な育ち」を形成する保育実践』新読書社
田川浩三編著 2010 『劇づくりで育つ子どもたち』かもがわ出版
豊田君夫著 1980 『保育をいかす劇あそび集』鳩の森書房